

## 帆船カティサーク号炎上について思うこと

ロンドン南東テムズ川沿いのグリニッジで保存展示されているカティサーク号炎上のニュースに驚きました（ロンドン 2007 年 5 月 21 日未明）。ラグビーのルーツ研究という課題を持って訪英した時の感激を懐かしく思い出しました。

グリニッチ天文台を通る子午線は経度ゼロです。世界の中心起点であることは大英帝国・英国人の力であり誇りでした。天文台の近くにその力を象徴するものの一つであるカティサーク号が展示されていました。カティサーク号は 1869 年に建造され英国に紅茶を運んだ「ティークリッパー」と呼ばれる大型帆船で、唯一現存するものです。ティークリッパーは世界中に植民地があつて日が没することのないあらゆる地域から富と財宝を本国へ持ち帰りました。グリニッチはそれらの出帆港です。テムズ川は潮の干満により水位の差が著しい川です。干潮変化時に港を出て一気に海洋へ出て世界へ雄飛していったのです。その時の希望に燃えた勇ましが想像できます。本来狩猟国であつた英国社会に海洋国の船の船長を初めとするリーダーや、船の管理責任者が多く求められました。



Wikipedia より引用

[http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/a/ad/Cutty\\_sark1.jpg](http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/a/ad/Cutty_sark1.jpg)

伝統的な型の背広を着用し山高帽にステッキ、悠然と歩いている紳士の姿から貧困な男性は想像できません。知能が低い人間も想像できません。力の強さは表面に出ていませんが、荒くれ船乗りを統率し指揮するには健全な身体と精神と決断力等の資質が必要で、唯温和であることは不適格に結び付いていたのです。

最初の訪英は、トゥイッケナムの RFU へ協会の紹介状を持って BETTER RUGBY 日本語版出版の挨拶とラグビースクールへの表敬訪問が主目的でしたが、二度目は、ラグビーを創造した英国社会の思潮と、ラグビーが紳士のスポーツと言われる所以でもある gentleman-ship や、勇敢であることを所以である fighting-spirit の根源を探る目的で課題を掲げてラグビースクールと特にグリニッジを訪問しました。

ラグビースクールではエリス少年について、卒業後のことやお墓がフランスにあることや、1823 年の出来事の確たる証拠がないが、超証拠の真実として語り継がれ、それを物語る 1870 年に描かれた宝物とされている一枚の絵があることをしりました。校風は同じパブリックスクールのハーローやイトンに比べて野生的であり、昔あつたと言われる抵抗の丘に見られるように自立心が強く有名パブリックスクールに対抗心が潜在したとみられ、それらがラグビー

に結実したと考えられます。それらが根づいた英国の社会風土を理解するためにグリニッチへはテムズ川を定期船で訪問するのが課題でした。それはテムズ川の干潮時と満潮時の水位の差を実際にみることの必要性からです。引き潮の速い川を下り海洋へ出る勢いと意気込みの源であったからです。

「英国は紳士の国」「ラグビーは紳士のスポーツ」という表現は紳士の要件の一つとして、紳士は心も身体も強くなくてはなりません。どんな困難にも負けず忍耐強くなくてはなりません。船内では船長の強力なリーダーシップの元、団結が何より大切です。一蓮托生ルール破りは絶対に許されません。社会はそのような若者を求め、親や学校はそれに応えるべく若者を鍛えました。

そして、一般社会の日常では、強い者には強くだけでなく、リーダーとして弱い者には思いやることが美德として要望され人格が形勢されていきました。ラグビーは社会の要望を受けて着実にその役目をはたしました。社会格差が広まり固定していく中で、紳士の表面型が悠然とした絵になっていきましたが、内面的なものも確実に長く受け継がれていきました。

紳士は「ルールを守る」ということの話の中で、「試合中相手を殴ろうと思えばいつでも、いくらでも（反則を取られずに）することができるが、それをしないことだ。ボクシングになってしまうから。」ということで、ゴルフの打数の自主申告や競馬のコース妨害も自発の問題だということです。自主的にルールの3つの意志を体して楽しむことであって、勝つためにルールの意志に反することをすることは、ルールぎりぎり一杯とかの問題でなく反則は反則で、ルールを守っていないということです。gentleman-ship に流れる意気と自負心をもって節度を守ることがラグビーを楽しむのに大切だと思います。

カティサーク号は修復作業中だったということです。部品の5割が別の場所で保管されていたということは不幸中の幸いでした。

2007.05.26  
西川 義行